

## 概念の整理

吉村 望\*

物事を「実体」ではなく、「関係」として認識しようというのが、20世紀に入ってからの学問上の最大の変革と考えられている。医学の進歩に大きく影響を与えた先人達の多面的な知識、諸科学における認識の方法は、概念と思想を生み出したが、古くから確立された学説と新しい概念との間には絶えない斗争の歴史が介在する。

疾患を如何に説明するかは、科学的医術の代表とされるヒポクラテスとその学派以来、医師に課せられた永遠の命題である。ただ日進月歩の医学・医療の世界にあって、ますます増え続け、複雑化する専門用語の中には、時代の変化と共に説明が不十分なもの、通用しなくなるものも少なくない。

そこで、新しく遭遇した現象や疾患を説明するためには、“概念の整理”が必要となる。最近、新しく登場した概念で、周術期医療に関係の深い用語、概念だけを取り上げてみても膨大な数にのぼる。例えば、compromised host, SCID, GVHD, recombinant drug, pulse 療法, SIRS, MODS, apoptosis, さては evidence based medicine (EBM) と、いちいち日本語に訳すのも面倒なものも多い。

一方、生体システムの恒常性を維持する機能として、ホメオスタシスの名称で古くからのお馴染みの概念は、未だにその存在を危うくはしていない。ところが、先日東京大学で開かれた「ホメオスタシスの現在 (いま)」というシンポジウムでは、最近の医学研究のあまりにも急激な要素還元

主義に批判が向けられたと聞く。

学問としての医学の領域の細分化、ミクロな面での追求に走りすぎ、複雑な生命現象を全体としてとらえる事を忘れかけているとの警鐘と受止めたい。われわれの周囲でも、分子生物学的手法でなければ先端的研究はなし得ないかのような風潮を感じている昨今であり、筆者は上記の報道に大いに共鳴した次第である。

第45回日本麻酔学会(4月16~18日, 1998, 鹿児島)では主題として「麻酔の専門性と周辺領域との調和」を掲げ、さまざまな新しい企画を試みたが、その中に「概念の整理」を入れた。現在、麻酔をはじめ周術期の領域で用いられている概念で、controversial な側面を持つもの、あるいは漠然と理解されているものについて、その道の専門家にわかり易く解説して頂くというのが狙いであった。その中には、third space, ステロイドカバー, MAC, supranormal oxygen delivery 等々が含まれ、何を今更と考えていた人達も、聞いてみて非常に役に立ったと仰言って下さる方が多く企画として好評であった。

21世紀を迎える頃には、医療界にも間違いなく“ビッグバン”が訪れようとしている。学際的な色彩を持つ日本循環制御医学会が今後さらに発展するためには、“循環制御”という概念を、もっと多くの各分野の人々に伝える努力が必要であろう。

\*鹿児島大学医学部麻酔・蘇生学講座